戦争と平和の資料館
ピースあいちニュース

第44号
2023年12月15日発行

〒465-0091
愛知県名古屋市名東区
よもぎ台2丁目820
電話・FAX 052-602-4222

発行:戦争と平和の資料館ピースあいち　http://peace-aichi.com/　【定価:30円】

開催中

第11回寄贈品展「戦争が遺(のこ)したモノたち」

2023年12月5日(火)～2024年2月24日(土)
休館日 日曜・月曜・冬季休館(12月23日(土)～2024年1月4日(木))

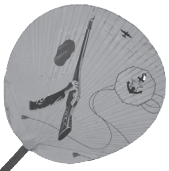
陶製アイロン　金属供出により金属が不足したため、代用品として作られた。

アジア・太平洋戦争の終結から78年の長い年月が過ぎました。戦争の記憶とともに戦争資料も年々失われてゆくなかで、新たに34名の寄贈者の方々から貴重な資料が寄せられました。

ブリキの衣装缶に収納されていた旧陸軍軍服をはじめ軍装品や生活用品など実物資料の多くは、遺品の中から見つかったものです。骨董市や古書店などで購入し収集した資料も寄贈されました。また、「戦争の記憶を記録として後世に伝えたい」という思いから戦争体験を冊子にしたものが数点あり、閲覧コーナーも設けています。

今回は、海外からの寄贈品として、「1945年6月15日付連合軍による名古屋地区地勢調査書No.134」の一部も展示しています。これは、沿岸地図(MAP8)をはじめ当時の名古屋地区が詳細に調査されていたことがわかる貴重な資料です。

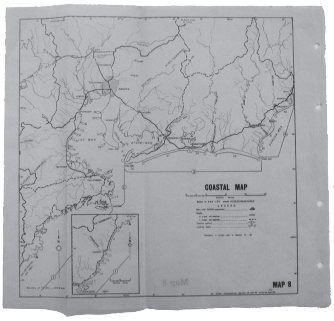
寄贈品を通して、戦時下の市民の暮らしや軍隊生活などその時代を懸命に生きた人々の様子を知ることができます。「戦争が遺したモノたち」が、私たちに伝えたかった思いを感じ取っていただき、あらためて平和の大切さを考える機会となることを願っています。



うちわ　愛国婦人会
愛知県支部作製

MAP8 沿岸地図

戦陣訓　1941(昭和16)年4月20日発行



「土の戦士　満蒙開拓青少年義勇軍」内原(うちはら)版・満州版

世界画報　国際情報社が刊行した写真を中心とした月刊誌

○関連イベント　いずれも電話予約が必要です

●2023年12月5日(火)
オープニングイベント　11:00～
4人の寄贈者に寄贈資料についてエピソードを聞く。

●2024年1月27日(土)
寄贈品展トークイベント　13:30～15:00
今回の寄贈品にまつわるお話を寄贈者、資料班、研究者の立場から語る。

お願い

正会員・賛助会員になって、ピースあいちを支えてください。

世界中で平和が脅かされている今、悲惨な戦争の歴史を伝えるピースあいちの活動がますます重要性を増しています。2007年に開館して以来、皆様のご支援と市民ボランティアの頑張りで、地元に根付くだけでなく、全国で存在を知っていただけるまでになりました。近年は若い世代の来館者が増える一方で、開設時にお力をくださった先輩のお姿をお見かけすることが少なくなりました。

会員登録数は、現在7百余名であり、最も頼りとする会費収入が少し減少しています。そこでこの度、新会員の募集に館を挙げて取り組むことになりました(本誌8頁と同封のチラシ参照)。

ピースあいちがこれからもその役割を果たすために、語り継ぎ事業の充実、展示の多言語化、時代に合ったIT技術の導入など、取り組むべき課題はたくさんあります。新しくお力を貸して下さる方が一人でも増えますように、皆様のご協力を重ねてお願い申し上げます。

予告 企画展「名古屋空襲を知る」 2024年3月12日（火）～5月18日（土）

2014年から東邦高校生徒会が市と市議会に要望や請願をしてきた「名古屋空襲慰霊の日」制定運動は大きく広がり、今年、制定へ向け動き出しました。航空機関連の軍需工場が多かった名古屋への空襲は、他の地域と違う特徴あるものでした。

今回の名古屋空襲展は、東邦高校の生徒会と美術科のご協力のもと、「名古屋空襲を知る」をテーマにその実相に迫ります。

【展示内容】

◇名古屋空襲とは？名古屋空襲を知ろう

◇名古屋空襲を忘れない―東邦高校の「慰霊の日制定運動」

◇美術作品で名古屋空襲を伝える―東邦高校美術科の作品展

予告 名古屋二期会アンサンブル研究会による ピース・クリスマスコンサート

2023年12月17日（日）
13:30開場 14:00開演
ピースあいち1階 交流のひろば
参加費無料 定員40名
（事前申し込み052-602-4222）
※コンサートのみの開館です。
皆さまご存知の日本のうた・平和を願って・オペラから・クリスマスソングなど。

第11回寄贈品展関連イベント 蓄音機で聞く戦前・戦後の歌謡曲

2024年2月10日（土） 13:30～15:00
ピースあいち1階交流のひろば
入館料で参加できます 定員40名
（事前申し込み052-602-4222）
大衆に親しまれた曲が発禁になっていったのはなぜかの解説もあります。

報告 映像コーナーも加わって、より印象的な展示になりました！ 「戦争の中の子どもたち」・「戦争と動物たち」展

2023年10月3日（火）～11月25日（土）

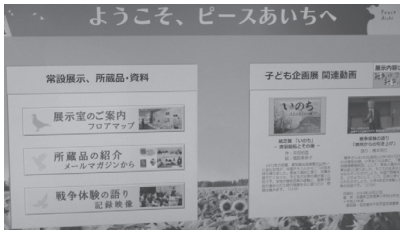
2011年の夏から始まった子ども企画展。今年も各テレビ局・新聞社に取材していただき、多くの来館者をお迎えすることができました。

特に嬉しかったのは、「『戦争と動物たち』のパネル展示がとてもわかりやすいので、子どもたちに見に来るように言いたい」という方がおられたことでした。「戦争の中の子どもたち」や「戦争孤児」の展示では、当時中学生だった方がご自分の体験を生々しく語ってくださいました。焼夷弾の残骸を焼け跡に拾いに行かされたこと、名古屋駅でたむろしていた浮浪児をよく見かけたことなど。「あの子たちは、その後どうしたのかな」と心を馳せておられました。

映像コーナーで紙芝居動画・満蒙開拓「いのち」や橋本克己さんの「満州からの引き揚げ」体験の語りを視聴後、拍手をされていた姿も印象的でした。「戦争のことが大変よく分かり上映時間も短いので、ぜひ子どもたちの平和学習に役立ててほしい」と言われました。来年は、小中学生の団体の来館がコロナ禍以前にもどることを願っています。

【関連イベント】秋の朗読会
ピースあいち朗読の会「オリーブ」
10月21日（土）13：30 ～ 14：30

凧になったお母さん、戦争孤児の記憶ほか、「戦争孤児」に特化した作品が朗読されました。会場はシーンと静まり返り、涙する人もいました。



報告　新美南吉という魅力ある若者の生きざまから学びました。
夏の企画展「新美南吉の生きた時代―文学と戦争と平和」

2023年7月18日（火）～9月9日（土）

会場風景

2年がかりで、企画してきた「新美南吉の生きた時代―文学と戦争と平和」が終わりました。入館者数は1287名（大人1011名、子ども276名）でした。

展示で好評だったのはパネルのイラストでした。野村郁夫さんによる美しい色彩の絵で「南吉の作品から現代につながる優しさや平和への思いを感じ取って描いた」とのことでした。

ウクライナとロシアの戦争をはじめとして、世界のどこかで内乱や反乱が起きている今だからこそ、南吉の生きた戦争の時代のことや、南吉が求めていた平和について読み取ってほしいと願った展示でした。童話作家『ごんぎつね』の新美南吉というだけではなく童話、詩、小説、日記などを通して、いろいろな側面があると受け取ってもらえたようでした。

2階映像コーナーは「南吉 童話の森」と名付け、企画展としては初めての試みで動画が視聴できるようにしました。南吉展を見た後で、余韻に浸りながら鑑賞する来館者も多くいました。野村さんはここにも、南吉作品の登場者たちが「本から出てくる絵」をたくさん描いてくださいました。また塗り絵もご提供いただき、子どもたちが楽しそうに色を塗りながら、ゆったりとした時間を過ごしていました。

展示にあたり、新美南吉記念館にはパネル作成及び資料貸し出しについてたいへんお世話になり、感謝しています。

ピースあいち　南吉 童話の森

○アンケートから

■新美南吉の生涯について、知らないことをたくさん学ぶことができました。（37歳男性）

■南吉の書いた童話の内容が育った環境に大きく影響されているにもかかわらず、明るい内容と優しい眼差しがとても印象的でした。（67歳男性）

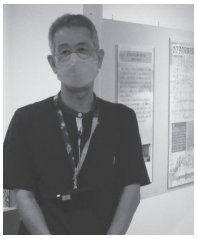
■戦争の時代に抗いながら作られた作品はあまり知られていませんが、『ごんぎつね』のように知られてほしいです。南吉のように心痛む児童文学者が現れることのない世界を願って。（44歳女性）

■オリーブの会の朗読は、読むのとは違う朗読（聴く）の良さが伝わって素晴らしかったです。（60歳女性）

童話の森で

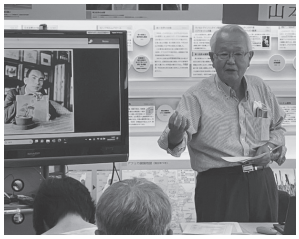
関連イベント

●7月18日（火）
野村郁夫氏による「ギャラリートーク」



パネルのイラストを担当した野村氏は、南吉が作品を通して伝えたかったことを考え、来館者にその思いが伝わるよう着色を工夫して、水彩画で表現したとのことでした。

●7月22日（土）
講演会「南吉とその生きた時代」



山本秀夫氏（新美南吉記念館第4代館長）

世に出たのが戦後だった童話『ひろったラッパ』については、「戦争へと向かう時代の潮流に逆らってでも反戦と平和の大切さを訴えたかったのではないか」と話されました。

●7月29日（土）　南吉作品の朗読会
ピースあいち朗読の会オリーブ

「手袋を買いに」「貝殻」ほか。さだまさし作詞作曲の「キーウから遠く離れて」が締めくくりに披露され、ウクライナとロシアの戦争が続いている今だからこその聴衆の皆さんの感動があったようでした。

●8月19日（土）「作って鳴らそう貝殻笛」

南吉が悲しい時に鳴らした貝殻笛。詩「貝殻」などに出てくる貝殻笛をつくって音を出そうという企画。子どもたちは上手に吹けるのに、大人は手こずって…。用意した30個の貝がなくなるほど好評でした。

報告

夏の戦争体験語りシリーズ2023

8月1日（火）～ 12日（土）
於：ピースあいち　オンライン

ピースあいちの語り手、語り継ぎ手のお話をボランティアが報告（要約）しました。

「戦争体験を聞くシリーズ」が今年も8月1日から12日まで開かれました。戦争の現場にいたことのある戦争体験者6人に加え、語り継ぎ手の4人からも臨場感いっぱいのお話をうかがいました。空襲直後の生々しい様子や、学童疎開の体験談、原爆を投下されたあとの広島・長崎の惨状。筆舌に尽くしきれないお話ばかりです。あの戦争から今日まで、日本は戦争をしたことがありません。「戦争は嫌だ」。これからもこの精神だけは守っていきたいものです。

8月1日（火）「父の戦争・堤成子さんの戦争」

田中玲子さん
（語り継ぎの会）

戦争について語ることのなかった父の思いを知るために語り継ぎ手になったという田中さん。熱田空襲については、語り手だった堤成子さんから取材したことを参加者に語りかけ、また桜井純さんが描いた熱田空襲の絵を見せながら戦争のお話をされた。

学徒動員で働いていた愛知時計電機船方工場での空襲では、たった8分で2068名の命が奪われた。当時13歳だった堤さんの生々しい証言と桜井さんの絵が映像で参加者に訴えかけた。

田中さんは、「私たち語り継ぎ手ができることは、堤さんたちの思いを語り継ぐこと。戦争とは何なのかを皆さんがそれぞれで考えていってほしい」と締めくくられた。（高野記）

8月2日（水）「空襲・学童疎開体験」

佐藤誠治さん
（89歳・語り手の会）

戦時中の厳しさを耐え忍んだり、苦しかった経験を若者に伝えたいという佐藤さんの強い思いを感じた。

米軍による機銃掃射から必死に逃げたり、空襲から逃れるために家屋の床下の防空壕に入ったりした。そこで亡くなった人々の遺体が乱雑に扱われる光景も目にした。また青少年学徒として働き、勉強することもできず悔しい思いをしたという話もうかがった。

ただひたすら我慢の日々だった当時と現在を比べて、今の生活がとても恵まれており、平和で豊かであるということ、また戦争という悲惨さを、私たちのような戦争を経験していない世代に語りを通して伝えてくださった。（大井記）

8月3日（木）「空襲・疎開体験」

高山孝子さん
（88歳・語り手の会）

高山孝子さんは1935年生まれ、物心ついた頃には食料が乏しくなっていた。8歳から国民学校になり、軍国少女であった高山さんは敗戦するまで日本は勝つと思っていたと語った。1944年3月に縁故疎開で東京から岡崎へ移り住んだ。同年暮れ、高山さんはそこで空襲にあう。岡崎では貧しい生活を送り、風呂になかなか入れなかったため川で泳いで風呂の代わりにしていた。

語りの中で高山さんは「戦争はしてはいけない」と何度も言った。高山さんは戦争孤児とはならなかったが、「戦争孤児が一番辛かったと思う」「普通の生活が普通にできることが一番」とも語った。（余語記）

8月4日（金）「空襲体験」

中野見夫さん
（84歳・語り手の会）

1945年6月9日の熱田空襲は、8分間の爆撃で2068名もの死者を出した。当時、私は船方国民学校一年生。熱田区六番町の実家の専光寺には、負傷した人が運ばれたが、高齢の目医者が傷口を消毒するだけだった。境内は遺体安置所となり、リヤカーで棺や工場の四角い箱が運ばれて大人がハンマーで遺体の関節を打ち、そこに収めていた。どんどん運ばれてくる遺体は直接荷馬車に積まれ、やがて引き取られないまま放置され、うじが湧き死臭が立ちこめた。今も目に焼き付いているのは、母親の遺体に寄り添う上半身のない赤ちゃんの姿…。子ども心に「戦争は、むごいものだなぁ」と、思った。（橋爪記）

8月5日（土）「私のヒロシマ」

佐々木陽子さん
（語り継ぎ手の会）

「戦争体験は人の数だけある。」そう言いながら、佐々木さんは自分の祖母の日記について語った。

8月6日に広島に原子爆弾が落とされ、大勢の命が亡くなった。爆心地に近い人間は身体が炭化して姿形も残らない。しかし、原爆の被害はその日を生き延びた人たちにも確実に魔の手を伸ばしていた。

原爆症になった祖父を看病していた祖母の日記には、祖父が息絶えるまでの5日間の記録が残っている。愛する人が目の前で衰弱していく姿を記したその日記は、戦争による被害をより鮮明で細やかに私たちに伝えてくれた。（中川記）

8月8日（火）「空襲・疎開体験・ゾウ列車に乗って」

萩原量吉さん
（83歳・語り手の会）

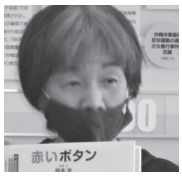
萩原量吉さんには小学校3年生（1949年、9歳）のとき、遠足で東山動物園に行き、象の背中に乗せてもらった思い出がある。ズボンを通して象の毛がチクチクと痛かったという。

萩原さんの戦争被害は空襲で三重県津市の自宅を焼かれたことだが、空襲警報が出たら防空壕へ避難するよう呼びかける「空襲警報の歌」は今も覚えているという。実際、萩原さんはきれいな声でこの歌を披露された。

疎開生活は食べ物と楽しみが乏しかったと話され、動物園の動物までが殺処分されるような時代は二度と繰り返してはいけないと訴えかけた。（桑原記）

8月9日（水）「叔父・叔母の長崎原爆」

大山妙子さん
（語り継ぎ手の会）



長崎の原爆体験を語り継ぐ大山さんは、父親を含む父方の兄弟を原爆で亡くしている。縁故疎開で長崎市外に疎開していたが、食料不足のため配給を取りに長崎市に来ていて被爆した。

8月9日に長崎で起こったことを子どもにもわかりやすいような絵本で読み聞かせた。絵本の1冊目は「あの日の夏」。2冊目は「火のトンネル」。銭座小学校6年生の描いた長崎の原爆についてのお話で、大山さんの父親や兄弟もこの小学校に通っていた。銭座小学校では今も1～6年生全員が平和教育を受けており、平和を語り継いでいる。（岩月記）

8月10日（木）「空襲体験と戦時下の暮らし」

井戸早苗さん
（84歳・語り手の会）

1939年昭和区円上町で生まれ、小学校1年生で終戦を迎えた井戸さん。幼児期の思い出は「恐怖」のひとことと当時を語られたのが印象的でした。

1944年12月13日には7回夜中を中心に空襲があり、東区から逃げて来た叔母の髪の毛はチリチリで、それぞれ家族はバラバラになった。自身もいつでも逃げることができるようにモンペを履いて寝ていた。枕元には防空頭巾、鉄かぶと、防毒マスク、リュックサックには三角巾、乾パン、米が入っていた。お母さんからは一人で困ったら米を渡すと助けてもらえるからと言い聞かされていた。灯火管制で真っ暗な中を逃げなくてはならなかった。（浅井記）

8月11日（金）「上野三郎さんの戦場体験を語り継ぐ」

澁谷美子さん
（語り継ぎ手の会）

澁谷さんは以前、職場のデイサービスで出会った男性が戦場で兄を失い、今なお自分だけが生き残ってしまって申し訳ないと思い続けている事実を聞かされ、戦争は残されたものにも深い傷を負わせたことを思い知った。

上野さんの語り動画や上野さん作の水彩画を使った戦場体験の紹介は臨場感にあふれ、特にマニラに向かう扶桑丸の船上の話、船が転覆してボートに乗って九死に一生を得るくだりでは、会場中が引き込まれ、皆が画面を食い入るように見つめていた。最後に「アネモネ戦争」という絵本の紹介があり、一人一人が考え、声をあげていくことができれば平和への大きな力になるだろうというメッセージが込められた。（佐々木記）

8月12日（土）「満州からの引き上げ」

橋本勝巳さん
（88歳・語り手の会）

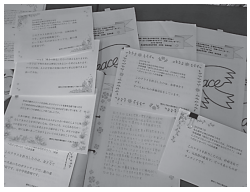
今回「満蒙開拓」についてお話をしてくださった橋本克己さんは明るく気さくな方である。しかしその少年時代は壮絶極まりなかった。家族で渡った満州国で開拓の夢を抱いていたのもつかの間、終戦とともに敗戦民族がたどる地獄の道が始まったのである。軍人に銃で脅され、伝染病で家族を失い、たった一人で日本に引き揚げてきた。10歳だった。しかしそのような状況の中でも、現地の方にご飯をもらったり泊めてもらったりと優しくしていただいたという経験もあり、そうした人たちのおかげで今こうして生きられていると話されていた。この戦争体験が、「この世から戦争を無くすことが務め」という橋本さんの平和への思いを今日まで作り上げているのである。（大橋記）

最近のピースあいち

はじまるよ！ピースあいちの国際交流

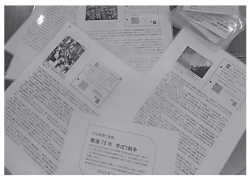
展示を通して世界の多くの方々と交流し理解を深め、平和の種をまいていきたい――。一昨年に「バイリンガルPT」を立ち上げ、常設展示の英語翻訳・展示に取り組んでいます。2024年3月9日には希望者を招待し、プレお披露目を兼ねた交流会を開催予定です。

『未来の中学生へのメッセージ』にお返事



9月、「ピースあいちさん、読んでください」と『現代に生きる私たちが、22世紀の中学生におくるメッセージ』が持ち込まれました。名古屋市立神丘中学3年生が書いた165通。社会科の授業での学びをもとに書いたものです。一人ひとりのメッセージには、ボランティアが手分けして返事を書きました。

中日新聞の連載に協力



今年8月1日から31日、中日新聞に「学ぼう戦争」というタイトルで、夏休みの子どもたちを想定した連載が掲載されました。監修はピースあいちです。Q&A形式で、1面に問い、最後の紙面に子どもたちの答えが載り、詳しい解説がQRコードで読めるというもの。当NPOの西形久司理事が新聞休刊日を除く30日間、クイズと解説を担当しました。

*クイズQ&Aと解説を日ごとにまとめたものはピースあいちでご覧いただけます。ご活用ください。

ピースあいちを語る

9月11日名城大学経済学部・経営学部の「起業講座」で、9月19日名古屋市立大学の「平和論講座」で、11月3日高校生オータムフェスティバルで、ピースあいちの設立と活動などについて宮原館長や運営委員たちが話をしました。

名城大学の講座では、NPOのピースあいちが「起業」というテーマで何を話すのか、学生たちも興味津々。講座後、「戦争を伝えていく資料館が必要という運動があり、それを社会も必要とし、市民が支援してピースあいちができ、さらにボランティアで運営を継続している。そういう形の『起業』もあると知った」という感想を多くいただき、新たな視点を得た気がしました。

「医療・介護・市民ネットワーク全国のつどい」に展示参加（9月17・18日）

名古屋での開催にあたり、実行委員会は「世界平和の実現なくして地域共生社会の実現はない」と様々な講演やシンポジウムを企画するなか、ピースあいちの紹介もしたいとお声がけをいただきました。展示した「名古屋空襲」のパネルにはたくさんの参加者が足を止め、交流を深めることができました。

楽しみながら主体的に参加する次世代交流チームの活動

ピースあいちの中で比較的に若く、仕事や学校があり活動に割く時間も限られているけれど、自分たちのペースで無理なく活動をしていきたいというボランティアが集まりました。名前には、次世代と交流し、平和と戦争の実相を伝えたいという思いを込めています。結成から5年、これまでマンガ「あとかたの街」の主人公が空襲の中を逃げた跡を辿る街歩きや、学生の方々と交流するイベント「学生の日」などを開催してきました。

就職や転職、コロナなどで2年ほど活動は休止状態でしたが、この夏はメンバーがテレビ番組に出演し、それが縁で戦争体験の聞き取りを依頼されて取り組みを始めました。新しいメンバーも加わって、絵本プロジェクトやピースオリジナルグッズ作成など、企画も盛りだくさん。若い感性と発想でいろんなことに、楽しみながら主体的に参加していきたいと思っています。

○これまでの活動

2018年	8月	『あとかたの街』を歩く実施
	9月	第1回 学生の日
	11月	「音楽の力」チャリティーコンサート出演
2019年	6月	第2回 学生の日
	8月	豊川海軍工廠跡の見学
	12月	第3回 学生の日
2020年		「History for peace」代表とon line交流
2021年	2月	ピースあいち常設展「愛知の空襲」紹介動画作成

▲学生の日

▲戦争体験の聞き取り

シリーズ 平和を守る仲間たち⑱　半田市平和資料室をつくる会

半田市では、何年か前から「平和資料室をつくりたい」という市民の声がありました。2022年からその動きが具体化し、2023年初夏に、市民有志で設立準備会が立ち上げられ、30名の呼びかけ人のもと運動に賛同して入会してくださる方を募ってきました。

9月24日、約50名の参加者のもと「半田市平和資料室をつくる会」設立のつどいが開かれました。総会では、代表に元小中学校教員の坪井二郎を選出し、

・資料室構想を考えながら運動を進める
・行政と話し合いを行う
・広範な市民の声を行政に届ける

などの活動計画を確認しました。また、事務局長の梶田稔はじめ、10名の事務局員も選出しました。

会の趣旨に賛同して入会された方は、10月8日現在で140名になりました。これから皆様のご理解とご協力をいただきながら運動を展開していきます。

（代表　坪井二郎）

23年（令和5年）9月29日（金）　毎日新聞

半田に「平和資料室」を

市民ら活動開始　戦禍の記録　後世に

戦後78年

戦争の惨禍を後世に伝え、平和について考える場を作ろうと、愛知県半田市の市民らが「平和資料室」の設立に向けた活動を始めた。太平洋戦争末期に空襲被害のあった同市では、戦時中の史実の掘り起こしなどを40年にわたり続けている市民団体もあり、証言や手記、写真などの資料を常設で展示、保管できる拠点を目指している。

9月下旬、「半田市平和資料室をつくる会」の初めての集いが同市内で開かれ、50人を超える市民らが訪れた。1983年に発足した「半田空襲と戦争を記録する会」のメンバーらが中心となり、昨年から岐阜市の平和資料室を視察するなどして準備を進めてきた。

つくる会代表に就いたのは、元社会科教員の坪井二郎さん（68）。東南アジアや中国などの戦場の最前線にいたという元陸軍大尉の父が遺した資料を受け継ぎ、自らも現地を訪れ調査したり、授業や講演で活用したりしてきた。集いで坪井さんは「戦争の理不尽さと平和な社会を語り継いでいくため、多くの皆さんと一緒に歩んでいきたい」と呼びかけた。

市内の博物館でも戦時中の資料約1000点を所蔵しており、こうした資料も含め、子どもたちにもわかりやすく展示することを目指す。会では今後、資料室のあり方を検討しながら、設立に向けた署名活動や行政への働きかけなどを展開していく予定。問い合わせは事務局（090-1785-9062）。【加藤少将】

「半田市平和資料室をつくる会」の集いであいさつする坪井二郎さん＝半田市で

産地からあなたへおいしさと笑顔をおとどけする―。
まるなか米店
とよかわ(0533)75-2209

博物館実習

今年も7月15日から9月9日までの10日間に、4人の学生を迎えて博物館実習を行いました。実習は、当NPOの理事による講義、資料の取扱い・活用等の実習、企画展示の作業、イベントの司会、展示ガイドや企画展案の発表、名古屋市内のフィールドワークなど。ボランティアと交流しながら行いました。

博物館実習の学生の発表会に名市大の学生たちや高校生も参加して意見交換

ボランティア・インターンシップinピースあいち

名古屋市立大学から、今年は4人の学生が6月10日から9月9日の間に計10回、ピースあいちのボランティアに参加しました。終了後、学生からは、「『戦争』という重いテーマを扱っているが、行ってみると、とても温かくて素敵な場所です。『平和とはこういうものだ』と感じられた」など感想をいただきました。

ボランティアの窓

ドングリの思い出

森下規矩夫

我が家の北側に大きな公園があってドングリの木が茂っている。季節になると、園児や小学生達が拾いにきて大はしゃぎ、昔も今もドングリは子ども達の人気者だ。

しかし、私には約80年前、戦時中の疎開先でドングリにまつわるやるせない思い出がある。食料用として1.5升の採取が宿題となった。拾い集めるのが遊びの中に入り込んできた。皆が拾うので量がたりない。どうにか1.1升まで集めた頃、8月15日の敗戦で、宿題も取りやめになった。その時の喜びは今でも忘れられない。

公園に行けばドングリはいっぱい落ちている。ああ、あの時これだけ沢山あればと心に浮かぶ。たかがドングリだが、このような体験を子ども達に二度とさせたくない。戦争は思わぬ影を子ども達に落とす。

慣れてはいけない

近藤世津子

2階展示室で当番をしていたある日のことです。中学生のグループが見学にやってきました。すると、そのうちの1人が急に気分が悪くなって嘔吐をしてしまいました。

その中学生は、展示の「眼をそらさないでください」を見て、ショックで気分が悪くなってしまったらしいのです。私は、この出来事に遭遇して、自分が今この写真を見て同じようにショックで吐いてしまうくらいの衝撃を受けるだろうか、と自問しました。この写真に、ある意味「慣れて」しまってはいないだろうか。

戦争、虐殺、差別のニュースに接した時に受けた「ショック」、感じた「怒り」「悲しさ」。そうした感情を持ち続けなくては。それらの存在に決して「慣れる」ことなく。

資料館探訪 36

『鶉野（うずらの）飛行場跡（旧姫路海軍航空隊基地）―兵庫県加西市―』

鶉野飛行場跡地は、兵庫県南部の加西市にある一大戦争遺跡群である。1943年10月旧日本軍海軍パイロット養成所として、姫路海軍航空隊の運用が開始された。同年8月には川西航空機姫路製作所の分工場として、組立工場が運用を開始し、「紫電」「紫電改」など海軍の戦闘機を最終組立後、試験飛行が行われていた。

戦局が悪化の一途を辿っていた1945年2月8日、神風特別攻撃隊「白鷺（しらさぎ）隊」が編成される。同年3月23日、白鷺隊の隊員たちは九州大分の宇佐海軍航空基地へ飛び立っていった。そして、4月6日から始まった菊水作戦の6回にわたる出撃によって21機63名の若者が沖縄の海に散っていった。

現在、全国でも珍しいコンクリートの滑走路の一部が保存されている。「soraかさい（鶉野ミュージアム）」では「紫電改」「九七式艦上攻撃機」の実物大模型の展示や姫路海軍航空隊の歴史を紹介する展示が見られる。また巨大防空壕（自力発電所）内のシアターでは特攻隊員たちの遺書の朗読劇を上映している。周囲には対空銃座跡や爆弾庫跡など戦争遺跡群が数多く残り、「鶉野フィールドミュージアム」としてガイドツアーも実施するなど、平和学習に力を入れている。　（N.K.）

soraかさい（鶉野ミュージアム）

巨大防空壕

月一回の発行で「ピースあいち」の活動がタイムリーにわかる「ピースあいち・メールマガジン（無料）」。「ピースあいち」のホームページからお申し込みください!

新会員を大募集中!! 知人・友人にもお伝えください。

「ピースあいち」は、民営でボランティア運営でも、光熱費・固定資産税等で施設維持に年1千2百万円かかります。他方で収入は、展示会などで来館された方の入館料（大人300円、こども100円）は、コロナ禍もあり、年百万円にとどきません。多額のご寄付や助成金がとても大きな助けになっていますが、毎年予定できるものではありません。最も頼りになるのは、会員の皆様からいただく年会費収入です。正会員6000円、賛助会員3000円です。いま、正会員が約320人、賛助会員は約400人。もっともっと増やしたいのです。

「ピースあいち」の活動に共鳴していただける方なら、どなたでも大歓迎です。電話・Fax 052-602-4222にご一報ください。クレジットカード、銀行振込で入会、寄付していただけます。

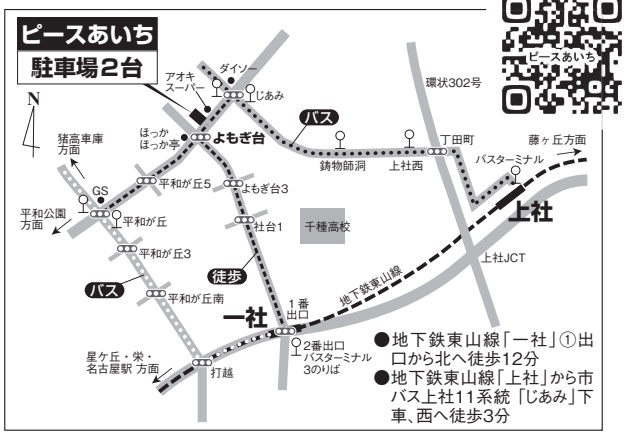
オンラインの**入会**はこちら

オンラインの**寄付**はこちら

【利用案内】

- ●開 館 日　火曜日～土曜日
- ●開館時間　午前11時～午後４時
- ●休 館 日　日曜日・月曜日
  冬季休館　2023年12月23日（土）～2024年1月4日（木）
- ●入 館 料　大人300円・小中高生100円
- ●常設展示「愛知県下の空襲」「戦争の全体像・15年戦争」「戦時下のくらし」「現代の戦争と平和」、準常設展示「戦争と動物たち」「戦争と子どもたち」。ほかに、図書や戦争体験DVDのライブラリーもあります。
- ●学校や団体の見学で展示ガイドや体験談を希望される場合は、事前にご相談下さい。
- ●駐車場は2台分あります（300円）。他に障がい者用が1台分あります（無料）。

■交通のご案内



●編集後記●

この1年、戦争のニュースがテレビや新聞から消えることはありませんでした。ウクライナとロシアとの戦いも、イスラエルとイスラム組織ハマスとの戦いも、和平にはまだほど遠いようです。「いい戦争はない」と分っているのに愚かなことです。その点、日本はもう80年近く、国の意思として他国と戦火を交えていません。褒められていいことかもしれません。しかし実際には、航空機やミサイルの購入費を含む防衛予算がどんどん増え、逆に日本からは「武器ではないから」という理由で戦闘機の部品の輸出が解禁になる気配です。平和希求とは反対向きの動きです。油断禁物です。大いに関心を持って世の中を見ていきましょう。（ks）